



平成28年度 第1回 対馬暖流系マアジ・さば類・いわし類長期漁海況予報

－ 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
西海区水産研究所がとりまとめた結果 －

今後の見通し(平成28年11月～平成29年3月)のポイント

海況

- (1) 薩南海域における黒潮北縁域の位置は、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。
- (2) 東シナ海から九州・日本海西部沿岸域にかけての表層水温は、全般的には「**平年並み～やや低め**」で経過する。

※引用符「」で囲んで表した平年比較の水温の高低の程度は以下のとおり。

「**やや**」 : 約3年に1回程度の出現確率

「**平年並み**」 : 約2年に1回程度の出現確率

漁況(来遊水準)

- (1) マアジは前年を下回る。
- (2) マサバは前年並み。
- (3) ゴマサバは前年並み。
- (4) マイワシは前年を下回り、平年を上回る。
- (5) ウルメイワシは前年を下回り、平年を上回る。
- (6) カタクチイワシは前年並みで、平年を上回る。

※「前年」は平成27年11月～平成28年3月。「平年」は過去5年の平均値。

問い合わせ先

国立研究開発法人水産研究・教育機構 西海区水産研究所

担当：業務推進部 青野、小林

漁況：資源海洋部 永澤、高橋

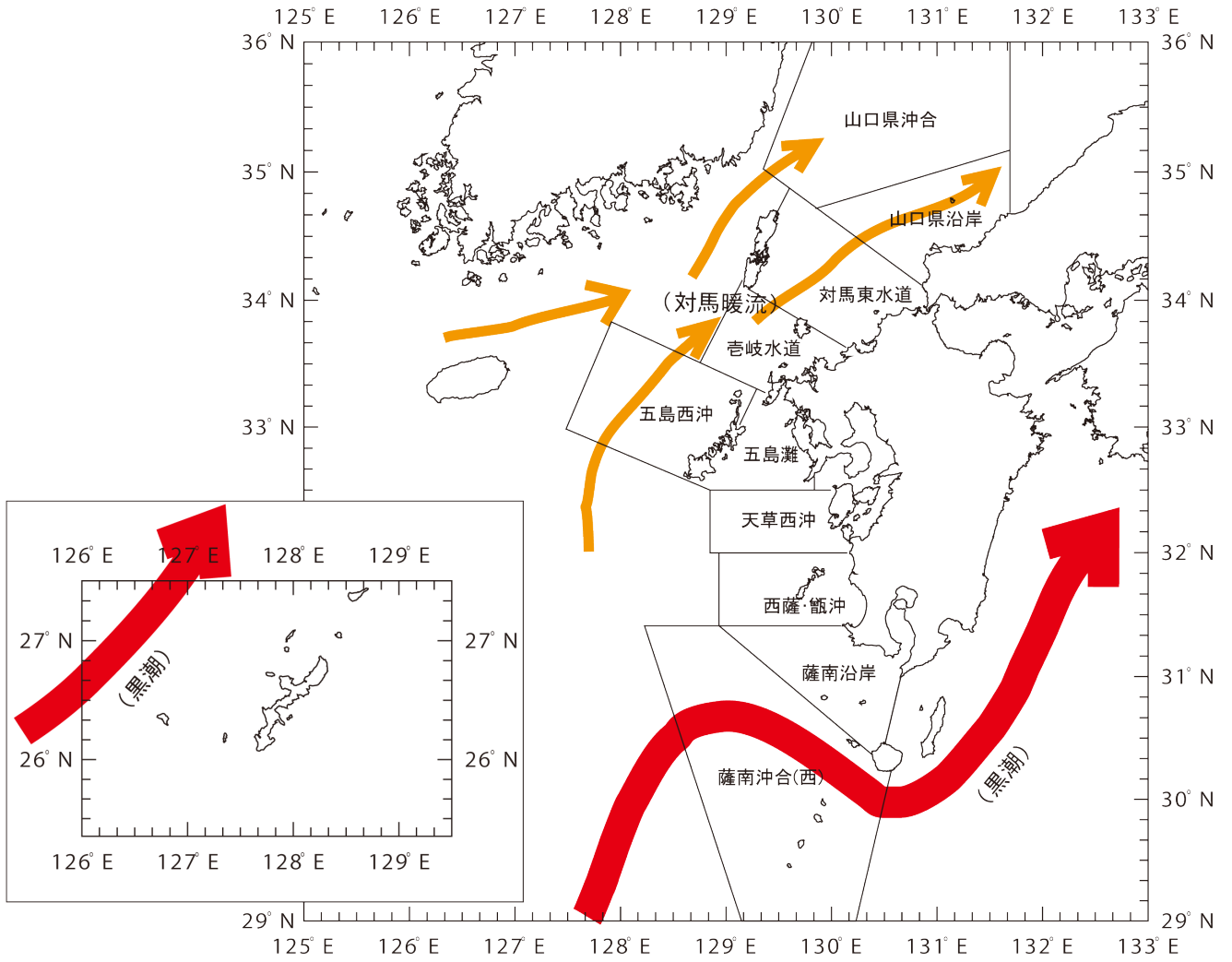
海況：資源海洋部 永澤、種子田

電話：095-860-1600、ファックス：095-850-7767

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

予報対象海域



西海ブロック海況予報

1. 今後の見通し（2016年11月～2017年3月）

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は離接岸を繰り返しながら、11月には「接岸傾向」となるが、全般的には「屋久島南付近」で変動する。

(2) 表層水温

山口県沿岸・沖合、対馬東水道、天草西沖、西薩・甕沖、薩南沿岸、薩南沖合、黒潮流域は「平年並み」、壱岐水道、五島西沖、五島灘、沖縄島周辺海域、大陸棚上は「平年並み～やや低め」で経過する。

2. 経過（2016年4月～10月）

1. 大陸棚上

(1) 海面水温

北部：4・5月「平年並み」、6・7月「やや高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

南部：4・5月「平年並み」、6・7月「かなり高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1) 海流

薩南海域における黒潮北縁域は、4～7月は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」、8・9月は「接岸傾向」で経過。

(2) 海面水温

4月「やや高め」、5月「かなり高め」、6月「はなはだ高め」、7月「かなり高め」、8月「はなはだ高め」、9月「平年並み」。

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1) 表層水温

山口県沖合：4月「かなり高め」、5月「平年並み」、6・8月「かなり高め」、9月「平年並み」、10月「かなり低め」。

山口県沿岸：4月「かなり高め」、5月「平年並み」、6月「かなり高め」、8月「やや高め」、9・10月「やや低め」。

対馬東水道：4～6月「やや高め」、7月「はなはだ高め」、8月「やや高め」、9月「平年並み」、10月「やや低め」。

壱岐水道：4月「やや高め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」。

五島灘：4月「かなり高め」、6・8月「やや高め」。

天草西沖：4月「かなり高め」、5月「やや高め」、6月「平年並み」、8月「やや高め」。

西薩・甕沖：4・5・8月「やや高め」。

薩南沿岸：4・5月「平年並み」、8月「やや高め」。

薩南沖合：4・5月「平年並み」、8月「かなり高め」。

沖縄島南東：4・5月「平年並み」、6・7月「はなはだ高め」、8月「かなり高め」。

(2) 表層塩分

山口県沖合：4月「平年並み」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「かなり低め」、9月「平年並み」、10月「やや低め」。

山口県沿岸：4・5月「平年並み」、6・8月「やや低め」、9・10月「平年並み」。

対馬東水道：4・5月「かなり低め」、6月「はなはだ低め」、7月「平年並み」、8月「やや低め」、9・10月「平年並み」。

壱岐水道：4月「平年並み」、6月「かなり低め」、8月「平年並み」。

五島灘：4月「平年並み」、6月「やや低め」、8月「平年並み」。

天草西沖：4月「やや高め」、5月「やや低め」、6月「平年並み」、8月「はなはだ低め」。

西薩・甕沖：4月「やや高め」、5・8月「かなり低め」。

- 薩南沿岸 : 4月「やや高め」、5・8月「やや低め」。
薩南沖合 : 4月「やや高め」、5・8月「平常並み」。
沖縄島南東 : 4月「かなり高め」、5・6月「平常並み」、7月「かなり高め」、8月「やや高め」。

3. 現況 (2016年10月中旬)

(1) 大陸棚上

海面水温は北部「やや高め」、南部「かなり高め」。

(2) 黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島南付近での変動(平均的な位置)」。

海面水温は「やや高め」。

(3) 対馬暖流域

海面水温は「かなり高め」。

(注) 引用符「 」で囲んで表した平常比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり。

「はなはだ」 : 約22年に1回程度の出現確率

「かなり」 : 約7年に1回程度の出現確率

「やや」 : 約3年に1回程度の出現確率

「平常並み」 : 約2年に1回程度の出現確率

東シナ海～日本海西南域マアジ・さば類・いわし類長期漁況予報

今後の見通し（2016年11月～2017年3月）

対象海域 : 東シナ海～日本海西南海域

対象漁業 : まき網、定置網、その他

対象魚群 : 0歳魚（2016年級群（2016年生まれ））、1歳魚（2015年級群）、2歳魚（2014年級群）。
魚の大きさは、マアジ・さば類は尾叉長、いわし類は被鱗体長で表示。

1. マアジ

(1) 来遊量 : 前年を下回る。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年・平年を下回る。

(3) 魚体 : 10～19cmの0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）および19～24cmの1歳魚（小銘柄）が主に、24cm以上の2歳魚以上（中・大銘柄）も漁獲される。

2. マサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を上回る。

(3) 魚体 : 25～28cmの0歳魚（豆銘柄）および29～32cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。

3. ゴマサバ

(1) 来遊量 : 前年並み。

(2) 漁期・漁場 : 沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並み。

(3) 魚体 : 25～30cmの0歳魚（豆銘柄）および29～33cmの1歳魚（小銘柄）が主に漁獲される。沿岸域では25～38cmの0～3歳魚以上（豆～中銘柄）が主に漁獲される。

4. マイワシ

(1) 来遊量 : 前年を下回り、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 14～17cmの0歳魚（中羽銘柄）主体に、18～22cmの1歳魚以上（大羽銘柄）も漁獲される。

5. ウルメイワシ

(1) 来遊量 : 前年を下回り、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 長崎県以南の沿岸域が漁場となる。

(3) 魚体 : 15～20cmの0・1歳魚（中羽・大羽銘柄）が主に漁獲される。

6. カタクチイワシ

(1) 来遊量 : 前年並みで、平年を上回る。

(2) 漁期・漁場 : 漁期は後半が主体で、漁場は沿岸域が中心となる。

(3) 魚体 : 10cm以上の0・1歳魚（大羽銘柄）が主体で、5cm程度の0歳魚（カエリ・小羽銘柄）も漁獲される。

注：「前年」は2015年11月～2016年3月。「平年」は過去5年の平均値。「並み」はCPUE等指標値の±20%の範囲。
沖合域とは大中型まき網が操業する対馬周辺から東シナ海。

漁況の経過（2016年4月～8月）および見通しについての説明

1. 資源状態

(1) マアジ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980・1990年代前半に増加し、1993～1998年には50万トンを超えた。その後、資源量は減少し、1999～2002年には30万～40万トンだったが、2003、2004年には増加し、再び50万トンを超えた。2005年以降は40万トン前後で推移していたが、2015年資源量は増加して53万トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のマアジ漁獲量は、1973～1976年には9万～15万トンであったが、その後減少し、1980年に4万トンまで落ち込んだ。1980・1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを超えたが、1999～2002年は14万～16万トンに減少した。2003年から漁獲量は再び増加し、2004年には19万トンであったが、2006年以降はほぼ横ばいで、2015年は13万トンであった。

(2) マサバ対馬暖流系群

東シナ海・黄海・日本海に生息するマサバの資源量は、1970年代から1990年代半ばまで、一時的に60万～70万トン台に低下した年はあるものの、100万トン前後で推移し比較的安定していた。しかし、2000年以降、50万トン前後に留まっている。2013年には1973年以降で過去最低の38万トンとなったが、2014年以降急増し、2015年の資源量は77万トンであった。

東シナ海・黄海・日本海での我が国のマサバの漁獲量は、1970年代後半は30万トン前後であったが、1990年代初めに15万トンほどに落ち込んだ。その後、1996年に41万トンまで増加したが、2000年以降、概ね8万～12万トンの低い水準で推移している。近年の漁獲量は、2013年に6万トンと1973年以降で最も少なかったが、その後増加に転じ、2015年は12万トンだった。

(3) ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に生息するゴマサバの資源量は、1992年以降は比較的安定しており、10万～20万トン程度で推移している。近年では、2008年に過去最低の9万4千トンとなった後、2011年にかけて14万3千トンにまで増加したが、2012年以降、緩やかに減少し、2015年の資源量は10万2千トンと推定された。

東シナ海・日本海での我が国のゴマサバの漁獲量は、年変動はあるものの、1970年代以降およそ5万トン前後で推移している。近年の漁獲量は、2011年の4万9千トンをピークに減少傾向にあり、2015年は3万1千トンだった。

(4) マイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するマイワシの資源量は、1970年代に増加し、その後1980年代にかけて高い水準にあったが、1990年代に急激に減少し、2001～2003年には過去最低水準となった。2004年以降は増加傾向にあり、近年では2010年に急増した。

東シナ海・日本海での我が国のマイワシの漁獲量は、1983～1991年の間、100万トン以上と多かったが、その後、急激に減少し、2001～2003年における漁獲量は1千トン程度であった。2004年以降、漁獲量は増加傾向にあり、2013年は8万6千トンと2000年以後で最も多かった。2014年の漁獲量は急減して9千トンとなったが、2015年には再び増加し6万9千トンとなった。

(5) ウルメイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するウルメイワシの資源量は増減を繰り返しながら推移している。近年では2003年以

降は増加傾向にあったが、2014年は5万3千トンと推定され、前年の9万9千トンより大きく減少した。

東シナ海・日本海での我が国のウルメイワシの漁獲量は、1976～1998年までは毎年2万トンを超えていたが、2000年には1万3千トンまで減少した。2009年以降、漁獲量は増加傾向にあり、2013年は5万トンと1996年以後で最も多かった。2014年の漁獲量は急減して2万5千トンとなったが、2015年には再び増加し4万2千トンとなった。

(6) カタクチイワシ対馬暖流系群

東シナ海・日本海に生息するカタクチイワシの資源量は、1990年代に増加し、1998年には30万6千トンに達したが、2001年には13万トンまで減少した。2007年には24万7千トンとなったが、その後減少傾向にあり、2014年は12万2千トンであった。

東シナ海・日本海での我が国のカタクチイワシの漁獲量は、1996～2000年には10万トン超であったが、2004年には6万1千トンまで減少した。2005～2008年には再び増加傾向を示したが、2009～2013年には減少傾向となった。しかし、2014年に再び増加に転じ、2015年の漁獲量は6万1千トンで前年と同程度であった。

2. 漁況の経過

2016年4月～8月の大中型まき網漁業の主な漁場は、対馬沖および東シナ海中部であった。この間の大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計3万4千トンで前年(2015年4月～8月、4万4千トン)を下回った。マアジは1万8千トンで前年(2万5千トン)を下回ったが、さば類は1万トンで前年(1万3千トン)並みであった。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁獲量は、前年を下回り、平年並みであった。漁獲の主体は15～25cmの1歳魚と15cm以下の0歳魚であった。マサバは、前年並みで、平年を上回った。漁獲の主体は25～40cmの1歳魚以上と24cm以下の0歳魚であった。ゴマサバは、前年・平年を下回った。漁獲の主体は32～41cmの2歳魚以上と30cm以下の0歳魚であった。マイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は、4・5月は15～22cmの1歳魚以上で、7・8月は6～17cmの0歳魚以上であった。6月はその両者が混ざった。ウルメイワシは、前年・平年を上回った。漁獲の主体は4月～7月まで15～25cmの1・2歳魚であり、6月から3cm以上の0歳魚が混じった。カタクチイワシは、前年・平年並みであった。漁獲の主体は4月～5月が8～11cmの1歳魚で、6月～8月は3～12cmの0・1歳魚であった。

3. 今後の見通しの説明

(1) マアジ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆・ゼンゴ銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体で、2歳魚以上(中・大銘柄)も漁獲される。2014年級群は2013年級群を上回り、2015年級群は2014年級群を下回る豊度と考えられる。2016年級群の評価は難しいが、2015年級群と同程度とみられる。これらから、0歳魚(2016年級群)は前年並みで、1歳魚(2015年級群)は前年を下回り、2歳魚(2014年級群)は前年を上回るが、主体となる1歳魚の豊度が低いと考えられることから、全体の来遊量は前年を下回ると見積もられる。

沖合域の漁況の指標となる大中型まき網のCPUE(1日1隻当たり漁獲量)(参考図参照)は、2012年から2013年にかけて低かったが、2014年以降は増加した。一方、沿岸域の漁況の指標となる代表的な沿岸漁業の漁獲量は2012年に減少した後、2013年以降は同水準を保っている(参考図参照)。来遊量は前年を下回ることから、沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は前年・平年を下回ると考えられる。

(2) マサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。2014年級群の豊度は2013年級群より高く、2015年級群の豊度は2014年級群と同程度とみられる。2016年級群の評価は難しいが、2015年級群と同

程度とみられる。来遊群の主体が0・1歳魚であることから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は前年並み、沿岸域の漁況は前年・平年を上回ると考えられる。

(3) ゴマサバ

例年、11月～3月期には0歳魚(豆銘柄)と1歳魚(小銘柄)が漁獲の主体となる。沿岸域では1月～3月期には2歳魚以上(中銘柄以上)も漁獲される。2014年級群の豊度は2013年級群と同程度、2015年級群の豊度は2014年級群を下回るとみられる。2016年級群の評価は難しいが、最近の漁況から2015年級群を上回るとみられる。これらから、全体の来遊量は前年並みと考えられる。

来遊量と直近までの漁獲状況を反映して、沖合域の漁況は前年を上回り、沿岸域の漁況は前年・平年並みと考えられる。

(4) マイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚(中羽銘柄)が主体に、1歳魚以上(大羽銘柄)も漁獲される。2016年級群の評価は難しいが、これまでの漁況の経過より、2015年級群の豊度と同程度と考えられる。2015年級群の豊度は2014年級群を上回ると考えられる。昨年、10月から12月にかけて、甑島周辺海域および牛深沖においてマイワシ魚群が多く漁獲された。これが、資源豊度のみによるものではなく、海洋環境や魚群の回遊経路といった来遊条件により単年の生じたものと考え、本年度11月～3月期の来遊量は、前年を下回り、平年を上回ると考えられる。

(5) ウルメイワシ

例年、11月～3月期には0・1歳魚(中羽・大羽銘柄)が漁獲の主体となる。2016年級群の予測は難しいが、これまでの漁況の経過より、2016年級群の豊度は2015年級群と同程度と考えられる。2015年級群の豊度は2014年級群より高いと考えられる。昨年、10月から12月にかけて、長崎近海、甑島周辺および牛深沖においてウルメイワシ魚群が多く漁獲された。これが、資源豊度のみによるものではなく、海洋環境や魚群の回遊経路といった来遊条件により単年の生じたものと考え、本年度11月～3月期の来遊量は、前年を下回り、平年を上回ると考えられる。

(6) カタクチイワシ

例年、11月～3月期には0歳魚秋季発生群(小羽銘柄)と、0歳魚春季発生群(大羽銘柄)および1歳魚(大羽銘柄)が漁獲の主体となる。これまでの漁況の経過より、春季発生群でみると、2016年級群の豊度は2015年級群と同程度と考えられる。秋季発生群の2016年級群の豊度を予測するのは困難であるが、2015年級群と同程度と考えるのが妥当であろう。全体として来遊量は前年並み、平年を上回ると考えられる。

表1. 沿岸域の漁況経過（2016年4月～8月）

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網漁業の水揚量は、1113トンで前年を下回り・平年並みであった（前年比75%、平年比99%）。	中型まき網漁業の水揚量は、652トンで前年並み・平年を上回った（前年比92%、平年比168%）。	
福岡	代表港中型まき網漁獲量は347トンで、前年・平年を下回り不漁となった（前年比23%、平年比57%）。漁獲のうち中、小銘柄がそれぞれ66%と半分以上を占めていた。棒受網での漁獲量は近年漁獲がなかったが、今年は4トンの漁獲がみられ、大中銘柄が78%となった。小型定置網の漁獲量は2トンで、前年・平年を下回り不漁となった（前年比17%、平年比21%）。	代表港中型まき網漁獲量は77トンで、前年・平年を下回り不漁となった（前年比18%、平年比23%）。漁獲の78%を小銘柄が占めた。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網漁獲量は0.3トンで、前年・平年を下回り不漁となった（前年比29%、平年比4%）。
佐賀	前年・平年並みであった（前年比91%、平年比80%）。	前年・平年を下回った（前年比67%、平年比57%）。	
長崎	地域により差があるが、前年・平年を下回った（前年比67%、平年比78%）。	地域により差があるが、前年並みで、平年を上回った（前年比116%、平年比125%）。	
熊本 牛深港	水揚量は73トンで前年・平年並みであった（前年比84%、平年比82%）。	水揚量は340トンで前年並みで、平年を上回った（前年比100%、平年比152%）。	
鹿児島	主要4港のまき網では、アジ仔・豆アジ（2016年級群）主体に、開聞沖、甑島周辺でまとまって漁獲された。期間中合計で543トンの水揚げがあり、前年（693トン）を下回り、平年（589トン）並みとなった（前年比78%、平年比92%）。		主要4港のまき網では、4～7月はゴマサバ中（2013、2014年級群）主体、8月以降はゴマサバ豆（2016年級群）主体に、馬毛、津倉瀬でまとまって漁獲された。期間中合計で5077トンの水揚げがあり、前年（7481トン）・平年（8116トン）を下回った（前年比68%、平年比63%）。

注：「前年」は2015年4月～8月、「平年」は過去5年の平均値。

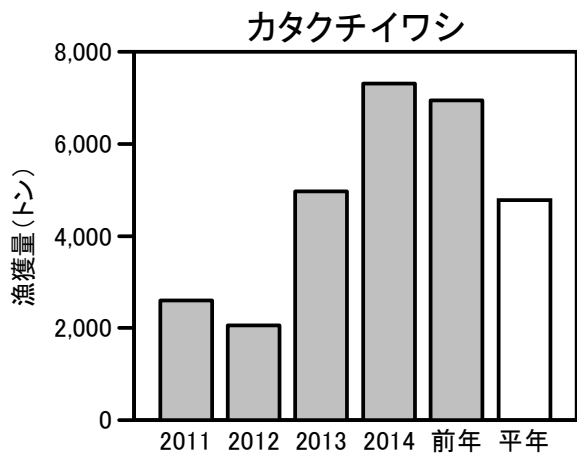
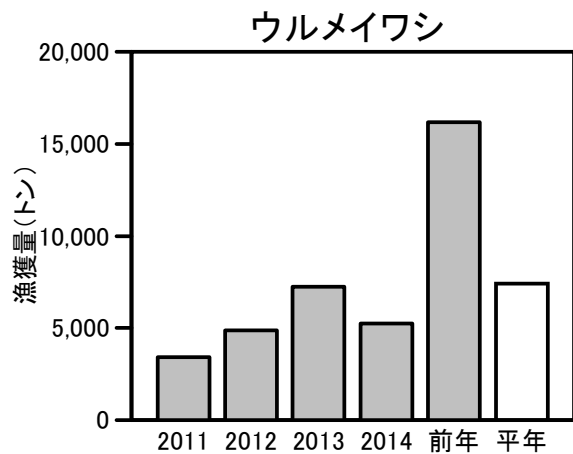
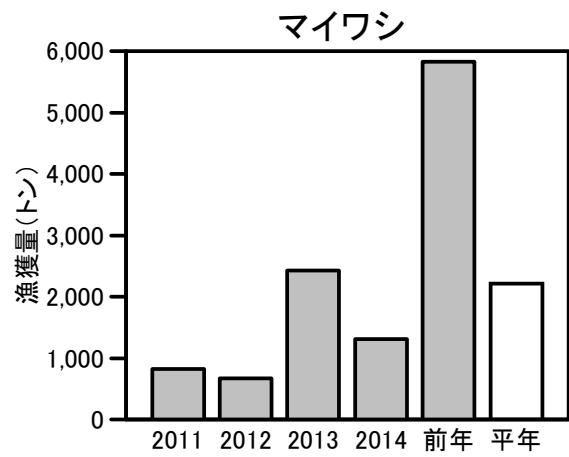
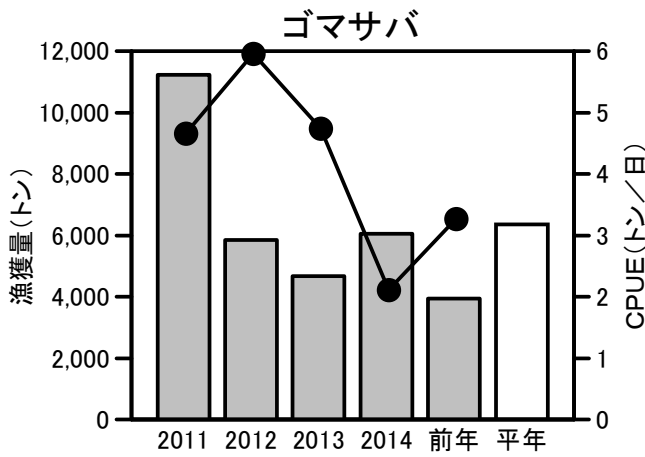
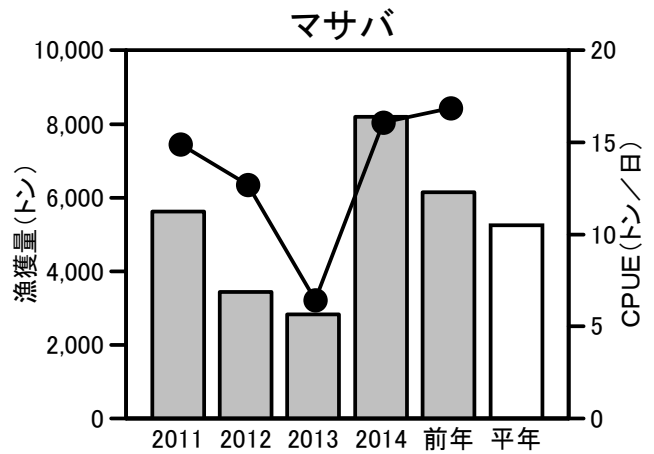
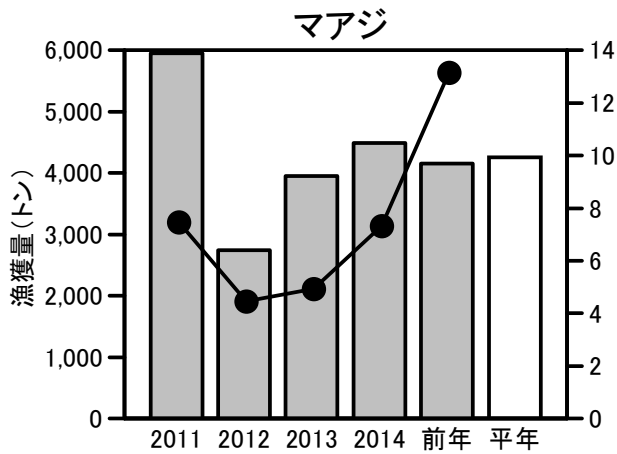
山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。

表1. 続き

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	中型まき網漁業ではほとんど漁獲されず、前年・平年を下回った(前年比0%、平年比1%)。湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、191トンで前年・平年を上回った(前年比2417%、平年比5744%)。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、34トンで前年を上回り・平年並みであった(前年比132%、平年比107%)。	湊地区の棒受網・すくい網漁業の水揚量は、小中羽主体に222トンで前年・平年を下回った(前年比24%、平年比30%)。
福岡	代表港中型まき網漁獲量は12トンで前年・平年を下回り不漁となった(前年比7%、平年比18%)。棒受網では0.05トンの漁獲がみられ、漁獲のなかった前年を上回ったが平年を下回った(平年比1%)。	代表港中型まき網漁獲量は65トンで前年・平年並みであった(前年比104%、平年比89%)。棒受網での漁獲はなかった。	代表港中型まき網での漁獲はなかった。棒受網漁獲量は8トンで前年・平年を下回った(前年比59%、平年比23%)。
佐賀	漁獲がなかった。	漁獲がなかった前年を上回り平年並みだった(平年比103%)。	前年・平年を下回った(前年比41%、平年比3%)。
長崎	地域により差があるが、前年・平年を上回った(前年比13109%、平年比298%)。	地域により差があるが、前年・平年を上回った(前年比524%、平年比358%)。	地域により差があるが、前年を上回り、平年並みであった(前年比123%、平年比109%)。
熊本 牛深港	水揚量は89トンで前年並みで、平年を下回った(前年比83%、平年比13%)。	水揚量は816トンで前年・平年を下回った(前年比56%、平年比73%)。	水揚量は2481トンで前年・平年並みであった(前年比101%、平年比115%)。
鹿児島	主要4港のまき網では、4~7月は小羽(2016年級群)主体、8月以降は中羽(2016年級群)主体に、枕崎沖、甑島周辺でまとまって漁獲された。期間中合計で2169トンの水揚げがあり、前年(729トン)を上回り、平年(1816トン)並みだった(前年比297%、平年比119%)。北薩海域の棒受網では、期間中合計で240トンの水揚げがあり、前年(73トン)を上回り、平年(245トン)並みだった(前年比329%、平年比98%)。	主要4港のまき網では、小羽(2016年級群)、中羽(2015年級群)主体に、甑島周辺、野間池沖でまとまって漁獲された。期間中合計で2927トンの水揚げがあり、前年(829トン)を上回り、平年(2786トン)並みだった(前年比353%、平年比105%)。北薩海域の棒受網では、期間中合計で947トンの水揚げがあり、前年(554トン)を上回り、平年(828トン)並みだった(前年比171%、平年比114%)。	主要4港のまき網では、4月は小羽主体(2015年級群)、5~7月は中・大羽(2015年級群)、8月は小羽(2016年級群)主体に、長島(内海)、甑島周辺でまとまって漁獲された。期間中合計で2586トンの水揚げがあり、前年(2084トン)並みで、平年(1772トン)を上回った(前年比124%、平年比146%)。北薩海域の棒受網では、期間中合計で443トンの水揚げがあり、前年(557トン)並みで、平年(567トン)を下回った(前年比80%、平年比78%)。

注：「前年」は2015年4月~8月、「平年」は過去5年の平均値。

山口県・佐賀県・長崎県・熊本県に水揚げされたさば類はすべてマサバとみなした。



今後の見通し参考図

沿岸漁業の漁獲量（沿岸漁況の指標の一つ；棒グラフ）と大中型まき網の1日当たりの漁獲量（沖合漁況の指標の一つ；折れ線グラフ、CPUE）。沿岸漁業の漁獲量は、マサバは山口県～熊本県のさば類漁獲量（ゴマサバを含むが主にマサバ）と鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のマサバ漁獲量の合計値、ゴマサバは鹿児島県（枕崎港・阿久根港）のゴマサバ漁獲量、その他は山口県～鹿児島県の主要沿岸漁業漁獲量。11月～翌年3月。平年は過去5年平均。

参 画 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産海洋技術センター
佐賀県玄海水産振興センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	(取りまとめ機関)
熊本県水産研究センター	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 西海区水産研究所